

研究論文

「亜細亜」という地域の枠組みについて

- 竹内好を継承する視点 -

吉野 浩司*

I. はじめに

近年、東アジア共同体の構想が、一国の首相の口からも語られる機会が増えてきている。我が国でも、2002年には小泉純一郎元首相がASEAN プラス3国を母体とする共同体を、また2009年には民主党政権に交代した直後の鳩山由紀夫元首相が「友愛」の精神による共同体を、それぞれ提唱している。しかしその一方で、現実政治においては東アジア共同体など、実現不可能な理想論だとして一蹴されてきたことも事実である。懐疑論者の多くは、その際、そもそもアジアの概念すら確定しておらず、たとえASEAN プラス3国に枠を限定するにせよ、そこに共通の価値観を見出すことは困難であることを、主たる反対理由としてあげている。

そこで本稿では、アジアとははたしてどこのことを指し、どのような意味が付与されてきたのかについて考えてみたい。こうした観点に立つなら、竹内好(1910年~1977年)のいう「方法としてのアジア」は極めて魅惑的な卓論といえよう。竹内はかつて、アジアのもつ意義について次のように述べた。すなわち、「西欧的な優れた文化価値を、より大規模に実現するために、西洋をもう一度東洋によって包み直す、逆に西洋自身をこちらから変革する、この文化的

な巻返し、あるいは価値上の巻返しによって普遍性をつくり出す」¹⁾ことにあると。東アジア共同体における「アジア」の規定がそうであるように、ここでいうところの東洋なるものも、「実体」として言い当てることは難しい。しかし「方法」としてなら、示すことができる。西洋を捉え返す道具としてのアジア。それが竹内のいう「方法としてのアジア」であった。

一般にアジアといえば、東アジア、西アジア、南アジア、中央アジアなどが含まれている。あるいはアフリカ大陸北東のエジプトを、アジアに属しているという見方ができることもいうまでもない²⁾。とりわけ西洋にとっての東洋、すなわちオリエントには、漠然とではあるが上記の諸アジアを覆う、実に広大な版図が想定されているといえよう。アジア、東洋、オリエント、東方、これらは一体どこに所在するのか。この問いに答えるために本稿では、様々なアジア論による「東」の観念を抽出する。それにより、世界が統一へ向かっていくグローバル化の時代にあって、あえてアジアという地域の枠組みを持ち出すことの意味を明らかにしたい。それは、この作業が竹内のめざしたアジアの「主体形成」の企図、すなわち「方法としてのアジア」を継承する視点にほかならないと信ずるからである。

*韓国又松大学グローバル文化ビジネス学部専任教員

Ⅱ．古代ヨーロッパにとっての東洋

ヨーロッパとアジアという呼称には、単なる便宜的な地域名以上のものがある。それらには、価値観までもが埋め込まれているからだ。元来、アジアとは線引きすることの困難な地域であった。その点で、ヨーロッパとは対照的である。例えば、EUが多くの困難を伴いながらも、拡大範囲をある程度確定できていることからして、それは明らかであろう。つまりヨーロッパとは、ヨーロッパ人という共同意識のもたれている地域、すなわち名称においてすでに同義反復の上に成り立っている土地なのである。アジアの場合はどうなるのか。それはヨーロッパ以外の地にあるというほかない。これはヨーロッパ人によるアジア認識のステロタイプな表明である。何ゆえそういえるのか。このことは、「ヨーロッパ」や「アジア」という語の語源をさかのぼることによって自ずと明らかになっていくであろう。そこでまずは、アジアならびにヨーロッパの語源から確認しておくことにしたい。

アジアとヨーロッパは、それぞれアッシリア語のアシュー（asu）、エレブ（ereb）に由来するといわれている。アシューは「はじめ」ないし「日の昇るところ」を、エレブは「闇夜」ないし「日の没するところ」を意味していたとされる。そこからさらに、フェニキア語のアシュー（Ashu）エレブ（Ereb）を経て、ギリシア語のアシア（Asia）とエウロパ（Europa）が派生したというのが、有力な説である。このアジアとヨーロッパを、意識的に対比させて用いたのは、ヘカタイオス（前550年～前475年頃）であった。彼の著作から判断すると、「当時のギリシア人に知られた世界は、エウローペーとアシエーに大別され、アシエーにはメソポタミアと

エジプト・リビュアが含まれていた」ことがわかる³⁾。

ここから窺知できるのは、古代ギリシア人の想定する世界像である。それは、下記のように説明できよう。まず、ヨーロッパの社会には、小規模な都市国家すなわちポリス、ならびに市民共同体国家があり、さらに植民市の建設が、地中海沿岸の各地で進められていった。このときギリシア人は、都市国家を建設していくなかで、アジアにある異質な国家形態に出遭った。ギリシア人が住む「エウローペー」では、「市民共同体を枠組みとする小国家」が建設されていたのに対し、「アシエーは専制君主の君臨する領域国家が優勢な地域」であった。つまり東のアシエーとのこの決定的な違いに、西側のギリシア人は気づいたので⁴⁾。

この印象は、ヘロドトス（前484年～前425年頃）により、より現実的な世界地図として書き換えられている。彼が『歴史』において描こうとしたペルシア戦争こそ、東のペルシアと西のアテネ、つまりはアジアとヨーロッパの初めての戦いであった。ヘロドトスは、当時小アジアに存在したリディアの王クロイソス（前595年～前547年頃）に、ペルシア戦争の原因を帰した。ヘロドトスの東西思想をさぐる上で、この事実を読み落としてはならない。ヘロドトスの判断は以下の通りである。アジアのクロイソスによって、ギリシア人は自由を奪い去られてしまった。そのことがまさに、古代における東西の大戦をもたらした原因であるというのだ。ポリスを築きあげたギリシア人の自由な西側（エウローペー）と、それを侵害しようとする東側（アシエー）という対立構図が、現実の歴史の中に現われている。ヘロドトスはそのようにペルシア戦争を読み解いたのである（『歴史』第1巻第4～5章）⁵⁾。

以上がヘカタイオスおよびヘロドトスの、東西の区分の概略である。それではこうした区分は、そもそも誰が発想したものなのだろうか。アーノルド・J・トインビー（1889年～1975年）によると、ヨーロッパがアジアとの違いを意識するようになったのは、そこを行き来する、フェニキアの水夫の働きが大きいという⁶⁾。確かに水夫たちは職業柄、アジアとヨーロッパを隔てる海を、常に意識せざるをえなかった。フェニキアの水夫にとって海峡とは、東と西の大陸を切り離すものにほかならない。地中海と黒海をつなぐダーダネルス海峡は、その意味で東西の分割線の始まりであったといえよう。

いわゆるヘロドトスの地図というのがある（図1）。それには三大大陸として、エウローペー（ヨーロッパ）、アシエー（アジア）、リビュエー（リビアすなわち北アフリカ）が区別されている。彼はこれら大陸をつぶさに観察し、記録したのであった。このとき、エウローペーとアシエーを隔てていたのが、ダーダネルス海峡であったのは、ヘロドトスの地図を見ても明らかであろう。

とはいえアジアとヨーロッパの分断線は、現代にいたるまで、地理学者の悩みの種となってきた。例えばヨーロッパからロシアにまたがるユーラシア大陸を、ウラル山脈という、最高峰

でも2000メートルに満たない小ぶりの山脈によって、東西に区分しなければならなかった⁷⁾。地理的に、あるいは交易上便利なはずの東西区分を、政治的なものに移し変えることは、もとより無理があるのである。

しかしヨーロッパ人は、一定不変の区分線を引くことよりも、むしろそうした線引きを絶えず繰り返していくことで、自らの存在意義を確認してきた。竹内もいうように、「ヨーロッパでは、観念が現実と不調和（矛盾）になると（それはかならず矛盾する）、それを超えていこうとする方向で、つまり場の発展によって、調和を求める動きがおこる。そこで観念そのものが発展する」⁸⁾。そのことからすると東洋という概念、したがって東西という観念が変容するのは、決して不思議ではないのだ。

ただ、にもかかわらず、自由とそれを妨害する侵略者というヨーロッパによる東西観の図式だけは、中世から近世、そして近代にまで、1つの基線が引かれているといいたいだろう。それらを論じ尽くすことは到底できないが、次節では、代表となりそうな幾人かの例を示すことで、その任の一端を果たすことにしたい。

Ⅲ．中世から近代にかけてのアジア

まずはアウグスティヌス（354年～430年）に視線を投じたい。『神の国』（412～427年）におけるアウグスティヌスは、それまでのアジアとヨーロッパとアフリカという区分を踏襲している。しかも、それだけではない。アジア人に対する古代ギリシアの哲学者たちの偏見をも、彼は引き継いでしまっているといえるだろう。アウグスティヌスはアジア人のことを、人間ではあるがヨーロッパ人に比べると一段と劣った種族に属するとしたのである。その理由として彼

図1 ヘロドトスの地図



は、アジア人という種族は、人間進化の最初の段階に位置しているという考えを示した。

これは世界の生成発展というギリシアに由来する哲学的発想を、人間の進化にあてはめることでできた想念だといえるだろう。こうしてヨーロッパ、アジア・アフリカ、そして未開の地という、中世における三層構造の世界認識は、完成されることになる。ここでいうところの世界認識とは、キリスト教徒の住むヨーロッパ、異教徒の住むアジア・アフリカ、そして怪物の人間の住む地域の三層から世界は成り立っている、という考え方である⁹⁾。それまで平面地図で示されていた世界が、文明の程度によって秩序づけられた立体的な世界像として再構成されたのは、このときであった。

この世界認識には、よりいっそう広大かつ詳細な地図が塗り重ねられることになる。この地図が、大幅に書き換えられたのは、15世紀末以降の大航海時代であろう。かつてはフェニキアの水夫が、東西の分断線を便宜的につくった。それが今度は、大航海時代の野心的な船乗りの手により、より広範な形で、見出されることになったのだ。言うまでもなく、冒険家自らが出航するヨーロッパと、目的地であるアジア、そして未開の地という地図である。

しかしながら大航海時代には、これまでとは全く異なっていたこともあった。それは、ヨーロッパとは異質なもう1つの文明を、ヨーロッパ人が発見したことである。ヨーロッパ文明を頂点として構成されていた三層構造の世界によると、文明とはヨーロッパだけに存在するものであった。しかし、実はアジアにも文明に相当するものがあったのだ。それが中華帝国である。ヨーロッパの冒険家たちは、地理的アジアとともに、文明的アジアを発見したといえよう。

まずはポルトガルが大航海時代に突入し、スペインがそれにつづく。ポルトガルのヴァスコ・ダ・ガマ(1469年~1524年頃)が、1498年にインド洋を横断しインドに到達する。さらにポルトガルは、マレー半島からマカオにまで勢力を延ばすこととなった。これらの地域は、はじめは貿易のための湾岸都市であったが、ついで宣教師の布教活動の拠点となり、最終的には政治的な植民地に変化していくこととなる¹⁰⁾。

他方では、スペイン王の命を受けたコロンブス(1451年~1506年頃)がアメリカ大陸を発見し、マゼラン(1480年~1521年頃)はフィリピンに到達する。特に南米のメキシコやペルーで銀を掘り当ててからは、スペインの勢力が他を圧倒するようになる。17世紀以降は、イギリス、フランス、オランダの時代となり、つづく18世紀になると、イギリスがオランダを駆逐する。こうしてオランダ領であったマレーやオーストラリアはイギリス領となる¹¹⁾。

このように、最初は冒険家・探検家が、後には宣教師がアジアの詳細を知るにつれ、ヨーロッパのアジア認識は、変更を迫られることとなる。このときのヨーロッパのアジア認識の変化は、ひるがえってヨーロッパ自身の自己認識にも、深刻な影響を与えることとなったことを忘れてはならない。

宣教師マルティーニ(1614年~1661年)による『中国古代史』(1658年)は、ヨーロッパに1つの衝撃を与えたといってもいいだろう。中国のその長い歴史が原因である。すなわち、もし中国史の古さが本当だとすると、それは聖書(ノアの大洪水)の記述と矛盾してしまうからである。ヴォルテール(1694年~1778年)は、「その世界史の概説にまず支那のことから筆を起し、その歴史が紀元前2515年に遡ることを記している」。そのことは、「18世紀中頃のフラ

ンスにおいては、実は天地のひっくり返るような大変なことであった。『聖書の創世記』によれば、「紀元前2100年代は名高いノアの洪水の時代」であったからである¹²⁾。

聖書の記録によると、人類はノアの大洪水によって、絶滅の危機をこうむった。そしてわずか8名の生存者から、歴史は再出発したことになる。もし古代中国の歴史の存在を肯定するならば、この聖書の誤りを正さなければならない。なぜならノアの洪水など無関係に中華帝国は存続してきたからだ。

この矛盾は、啓蒙思想期のアジア停滞論により、何とか解消されることとなった。それは、どのようにであろうか。中国は、哲学や文学に関するかぎり、ヨーロッパに比肩するものであった。しかし先哲崇拜の念が強すぎて、それ以降の発展を阻止してしまった。これが啓蒙思想期の典型的なアジア認識であるが、こうした解釈は、後に、モンテスキュー（1689年～1755年）からヘーゲル（1770年～1831年）にいたる、アジア的専制やアジア的停滞といった東洋に関する記述を決定づけたといっていよう。

モンテスキューは、気候ないし風土によって、アジア人の奴隷的性格を説明した。彼にとってのアジアとは、トルコからペルシアを経てインドにいたり、さらに中国と朝鮮と日本をも含むものである。これらの地域は、等しく酷寒ないし酷暑の気候をもち、ヨーロッパのような穏やかな温帯地域をもたない。したがって、アジアでは、強く勇敢な人間が、脆弱な人々を支配するという構図ができあがっているというのである〔『法の精神』（1748年）第17篇第2章～第3章〕。

アジア人の奴隷的状态について、いっそう直截に述べたのはヘーゲルである。彼はアジアと、ギリシア・ローマ、そして新興のゲルマン

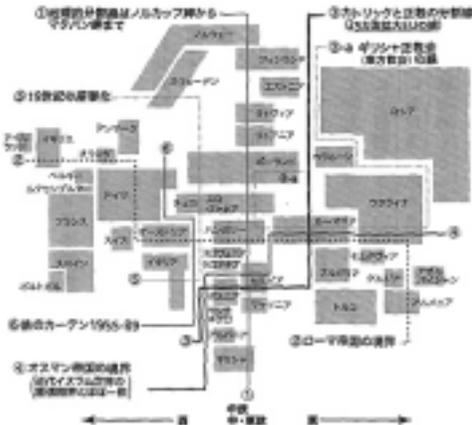
民族について、次のような比較を行った。東洋は過去から現在にいたるまで、一人が自由であった。ギリシアとローマの世界は、特定の人々が自由であった。そしてゲルマン世界は、万人が自由であると〔『歴史哲学講義』（1822～1831年）〕。ここからマルクス（1818年～1883年）のアジア的生産様式論に到達するには、もう一步のところである。

専制的ないしは奴隷制的な性格をもつアジアは、ギリシア・ローマの古代的生産様式ならびに、それにつづく封建的生産様式に属する地域であるとされた。言い換えると、近代ブルジョワ的生産様式は、ヨーロッパでのみ発生したということである。こうした認識は、ヴェーバー（1864年～1920年）の宗教社会学の問題設定の中にも色濃く映し出されている。「いったい、どのような諸事情の連鎖が存在したために、他ならぬ西洋という地盤において、またそこにおいてのみ、普遍的な意義と妥当性をもつような発展傾向をとる　と少なくともわれわれは考えたい　文化的諸現象が姿を現すことになったのか」¹³⁾。こうしたヴェーバーの問いの立て方それ自体が、すでに見てきた古代以来の西洋の東洋という前提を反映しているといえるだろう。

IV．もう一つの東

だが、こうした東西の区分について、議論をより複雑にしている、もう一つの事実も書き漏らしてはならないだろう。言うまでもなくそれは、第二次大戦後の東西区分である。ヨーロッパは「鉄のカーテン」（1946年）により、東西に分断され、冷戦構造へと組み込まれていった。資本主義を採用する西欧は、自陣営以外の地を東側（East）、すなわち東欧と呼称した。

図2 多様なヨーロッパの境界線



羽場（2004）『拡大ヨーロッパの挑戦』中央公論新社、41頁ページ

これは歴史的に見ると、キリスト教教会の東西分裂、いわゆる大シスマ（1054年）の区分と、ほぼ重なり合っているのが興味ぶかい（図2）。確かに旧チェコスロバキアやハンガリーやポーランド、旧ユーゴスラヴィアなどの中欧諸国の例外はある。しかしそれらを除くと、西はローマ・カトリック教会（後にプロテスタントが分立）、東は東方正教会というように分断されたものにほかならないからだ。こうして東という言葉には、もう1つの含意が加わることになる。

だがシスマとは、単にヨーロッパがキリスト教の分裂により、東西に二分されたというだけではないのだ。東側の正教会の領域の内部でも、アジアなのか、それともヨーロッパなのかという判定を迫られることとなったのである。その理由は、正教会の総本山が、コンスタンティノープルという、東西の境界面に位置していること、またアンティオキアやアレクサンドリアといった、アジアやアフリカの地区が、主要な教区となっていたことなどである¹⁴⁾。

ここで中欧についても一言述べておきたい。

中欧とは、鉄のカーテン以東とギリシア正教会圏以西という2つの境界線の間に挟まれた地域である。この中欧が、冷戦終結後、東西のどちらに位置するのかをめぐり、混乱を呈していることは言うまでもない。そしてまた拡大EUの困難さの1つの原因を作っているのも、他ならぬこの中欧の諸国である¹⁵⁾。

トインビーは、ポーランドとハンガリー（そしてスカンディナヴィア諸国）が西欧キリスト教に改宗し、ロシアが正教に改宗したときに、ヨーロッパは完成され、「鉄のカーテン」が下ろされたときに、ヨーロッパは破壊されたとした¹⁶⁾。この文脈からすると、現在進められている、EUの拡大は、その破壊されたヨーロッパの修復作業を行っている途上である、ということになるだろう。

現在のEUが、ローマ・カトリックおよびプロテスタントを、主たる基盤とすることは疑いない。しかしこのEUを拡大していこうという動きは、まさに一度はヨーロッパ以外（東側）とされた地域を、ふたたび包み込もうとするものである。これは最終的には、東方正教会の版図とも大きく重なり合う部分にまで達しても不思議ではない。

このように整理してみると、確かなものに思われていたヨーロッパの枠組みでさえ、その基盤となると実にあいまいなものだ、ということがわかってくる。トインビーは次のようにいう。「ヨーロッパという名を文句なくもつ資格のある地方は、エーゲ海口からアゾフ海頭へとつながって延びる海峡のヨーロッパ側海岸のヒンターランドであった。これはヨーロッパという名が適用された大陸の最初の地方であった。しかし、ヨーロッパの中核であるこの東南部は、西欧史の近世ならびに中世において、常に西欧世界の境界外にあった。それは東方正教キ

リスト教世界本体の領域内であったし、今でも依然としてそうである」¹⁷⁾。

そうしたあいまいさは、どうやら、ヨーロッパ人がヨーロッパとみなす部分、それがヨーロッパである、という同義反復の定義からきていると考えて間違いない。その同義反復によりEUは、これからもヨーロッパとは、そしてアジアとは、一体どこからどこまでを指すのかという問いに悩まされつづけることだろう。

上述のように、ヨーロッパとアジアの語源的な研究から始まり、古代から近代にいたるまでのヨーロッパのアジア観を振り返ってみてわかることは、3つのことである。第一に、アジアとヨーロッパは、それぞれ世界の一部をなし、しかもそれらを併せることで、おおよそ世界全体が形成されるということ。つまりところアジアとは、ヨーロッパ以外の地であるということだけが、ヨーロッパのアジア観を一括りにできる特徴であると見なされてきた。

そして第二に、古代から一貫してアジアは植民都市であり、また権力者の支配する、専制国家を育んだ土地柄であったということ。これらのことは、近代においてアジアが植民地化されたことを考えると、単なる語源的詮索以上のものがある。

しかしながら第三に、アジアという地域が、ヨーロッパにとり興味の尽きない土地であったことも、付言しておいたほうがよいだろう。いやむしろヨーロッパは、アジアによって近代化を成し遂げることができた、という一面さえも垣間見られるのである。次節で論じるように、少なくとも15世紀以降の東西文化交流史を振り返ってみると、明らかにそういえるのである。

以上のことを竹内の議論によって一般化すると、次のようになるだろう。「Aが存在するということが、Aが非Aを排除するということで

ある。ヨーロッパの東洋への侵入は、一方的には起こりえない。相手を変革し、同時に自己が変革される運動である」¹⁸⁾。Aであるヨーロッパが存在し続けるには、非Aである東洋の排除を行い続けなければならないということである。そしてそれによりヨーロッパも変容していくのである。

次節において、主にアジアの立場から問題にしたいことは、この第三の論点と関わっている。すなわち15世紀の東洋と西洋の交流により、アジアにおける東西区分は、大きく書き換えられることとなる。またさらに、近代ヨーロッパによりアジアが植民地化されたことによって、その区分はいっそう強く印象づけられることにもなった。それらを探ることで、アジアの東洋観という自己認識ができていくさまを確認できるのではないだろうか。要するに、ヨーロッパによるアジア概念の歴史を、アジア自らの「主体化の過程」として捉え返そうというのが次なる課題である。

V. アジアにとっての東洋

当然のことながら東洋という漢語には、近世・近代におけるヨーロッパの侵入よりも前に、それ本来の意味があった。それが幾度かの変転をへた後に、ヨーロッパと対をなす概念としての東洋（アジア）という呼称が定着するようになり、現在にいたる。一般的には、次のようにいうことができるだろう。「抑も『東洋』とは何であるか。其は根本的に文化的観念であり、文化史的・文化地理的に限定せらるべき概念である。『アジア』といふとき、其は自然的な大陸として考へられよう。又『極東』とか『東亞』とかいふとき、其は政治的・経済的な意義を持つやうである」¹⁹⁾。

このような用法は、現在でも、ある程度は承認されているといえるだろう。例えば東洋美術、東洋思想など、文化概念としては東洋という言葉が選ばれることが多い。一方、片仮名書きでアジアという場合には、しばしば自然地理的な意味で用いられてきた。では極東や東亜という語の語感については、どのようなことがいえるだろうか。歴史的には極東軍事裁判所や、東亜協同体という言い方がなされたことがある。今ではいささか古びているが、それらは政治経済的な用語として使われてきたといえるだろう。

これらは一般論であり、さまざまな論者が自らの立場により、多様な用い方をしてきたことは言うまでもない。上に見たヨーロッパにおける東西の対比がそうであったように、東洋および西洋という漢語にも、それらを論じようとするものたちによって、独特の文化的、宗教的な潤色が施されてきた。そのことについて、もっともな説明を与えているのは、東洋史家の宮崎市定(1901年~1995年)である。

宮崎は、先行研究の蓄積の上に立って、アジアにおける東洋および西洋の語源を、およそ以下のように突き止めた。「東洋」という言い方は、元末から明初頭の中国から起こった。大まかに言うと、中華文明圏の勢力のおよぶインドシナ半島を境に、その東側にあるフィリピン諸島までが「東洋」、西側のインド洋方面が「西洋」と呼ばれた。そしてその東西を分ける線は、歴史的に変化していく。そのわけは、拠点となる港湾都市の移転と密接に関係しているからだ、ということに宮崎は気づいた。具体的には泉州と広東という港が栄えるごとに、そこを起点とする東西の分割線が引かれることとなる(図3)

範囲についていうと、アジアから見た西洋の

図3 東西洋境界線変遷図



宮崎市定(1942)「南洋を東西洋に分つ根拠に就いて」『宮崎市定全集19』岩波書店、274ページ

方は、その版図が限りなく開けているように思われる。それは航海技術の発達により、海岸線に沿ってより遠くまで遠征できるようになったことと並行している。世界地図を広げてみると明らかなように、東側は太平洋の大きな壁に阻まれている。それにひきかえ西側は、マラッカ海峡を抜けると、陸づたいにインド、アラビア半島、アフリカにまで開かれていることがわかる。漢語としての西洋が、西へ西へと拡大していった理由は、ここにあった。そしてついに、大航海時代のヨーロッパ人によりアジアが発見されてからは、漢語の西洋が、しだいにヨーロッパを指すようになっていく。それにひきかえ漢語としての東洋は、かなり特殊な意味をもっていた。地理的ならびに海洋技術的な理由から、中国は東側の太平洋への航海に積極的ではなかったのだろう。それによって東洋の範囲は、さほど広がっていかなかった。後述するように、極端な例としては日本のみを特別に限定して東洋と呼ぶこともあったほどだ²⁰⁾。

さしあたりアジアにとっての東洋と西洋の概

要は、以上のように理解してよいだろう。しかし宮崎が先立つ研究を整理した上で、上記のことをまとめながら、一点だけ見落としていることがある。それは、山本達郎(1910年～2001年)の論点である。山本は、海峡およびそこを通る水夫が、東西を分かち線を描くのに重要な役割を果たした、という事実に着目した。これが興味ぶかいのは、ヨーロッパにおけるフェニキアの水夫が、ダーダネルス海峡を重視し、そこを東西に分岐点にしたという事実と好対照をなしているからである。確かにヨーロッパと同様の事例は、アジアの中にも発見することができるのである。

上述のように、中国はインドとも交流をもっていた。インドへ行くには、インドシナ半島の南端とスマトラ島の間にあるマラッカ海峡を通るのが、もっとも便利である。いわゆる海のシルクロードである。それが漢語としての東西の区別を知る上では決定的であるとして、山本は次のようにいう。「所謂西洋はマラッカ海峡から西行する船の集まる所であり、印度の産物の貿易を行ふと共に、西方のペルシャ・アラビヤ方面との取引の中継所として特殊な意味を持つ所」であったと²¹⁾。

マラッカ海峡を抜け、遠く西方の地との交易を結んだ主要な人物を挙げるとするならば、鄭和(1371年～1434年)の名が最初に思い浮かぶ。15世紀、明の永楽帝の治世である。鄭和はジャワからペルシア湾をへてアフリカにまで足を伸ばした。その功績により、漢語としての西洋は、近代以前にかなりの拡張を遂げることができたのだ。

ここで、この15世紀末から16世紀にかけてのアジアとヨーロッパの関係は、いまでは想像できないような逆転した世界であった、という事実を確認しておきたい。つまりこの当時は、

「ヨーロッパがアジアの下に立っていた」という事実である。立ち入っていると、「ヨーロッパが強くなった1つの大きな転期は、ヨーロッパの近代化、モダンヨーロッパの成立にある」のは疑いないとしても、それは「ヨーロッパだけの力によるのではなくて、アジアの力が実は大きな影響を与えている」ということである²²⁾。15世紀から16世紀の転換期は、その意味で、極めて画期的な時期であったといえるだろう。かつてラック(1917年～2000年)が『ヨーロッパ形成期におけるアジア』を書いて、そのことを論じた²³⁾。また近年では、「リオリエント」という概念で、フランク(1929年～2005年)がそのことを論証しようとしている²⁴⁾。

15世紀以降にアジアと出遭った後のヨーロッパ人は、東方世界をどのような目で眺めたのだろうか。先に触れたようにヴォルテールは中国史の古さに驚嘆するとともに、ヨーロッパのような戦争の多い地域と比べて、その当時の中国文明が比較的安定した世界であることを知った。彼が活躍したのは17世紀から18世紀にかけての、いわゆるニュートン(1642年～1727年)の科学革命の時代であった。別の言い方をするとキリスト教思想の影響力が、しだいに陰りはじめる時代でもあった²⁵⁾。つまりアジアがヨーロッパに与えた恩恵は、交易およびそれにつづく植民地経営への転換による、莫大な経済的利益ばかりではない。そうした巨額な富の流入とともに、アジアの存在それ自体が、ヨーロッパ思想界に大きな衝撃を与えたのである。

こうした、アジアとヨーロッパの文明論的な出遭いは、両者のカルチャーショックとでも呼びうるものであった。それを象徴するのが、マテオ・リッチ(1552年～1610年)の万国地図である。まさにヨーロッパとアジアという、2つの中華帝国の出遭いが、マテオ・リッチの世界

地図に表象されているといえるだろう。

これより時代を下ると、アジアにおいて「東洋」という語は、しだいにその範囲を狭め、ついには日本のみを指すようになった。そしてそうなると今度は、極東の孤島日本による「東洋」の新たな意味づけが、創出されることとなった。佐久間象山(1811年~1864年)の漢詩に、「東洋道德西洋藝」という有名な一句がある。東洋は道德が、西洋はテクノロジー(技芸や学芸)が盛んであることを対比させて吟じたものだろう。江戸末期には、すでに和魂洋才を唱えるような風潮ができあがっていた、ということである。

だがアジアにとって西洋の産業革命が社会や思想に与えた影響は圧倒的であった。その結果として劣等意識を抱いて東洋をとらえる考え方が、同じ江戸末に芽生えてくる。その思想は、中村正直(1832年~1891年)ら啓蒙思想家、あるいは蘭学者などにあらわれているものだろう。一面では文明開化の発想に連なるものであるが、その裏面には、東洋は西洋にすべての点で及ばないという諦念に似た感情もめぐりがたく存在している²⁶⁾。

だが明治維新から日清、日露戦争をへた日本の近代化が、その東洋の劣等意識を払拭するような働きをした。そうした意識の変容が、しだいに遅れを取った民族の連帯としての「亜細亜」という観念に固まっていく。その観念を押し広めようとしたのは、近代日本における東洋史学であった²⁷⁾。東洋史が、1つの「亜細亜」という観念を創造しようとした。劣等者としての「東洋」から、互助連帯の「亜細亜」の共同体へ。そうした観念が、一部の知識人に限定されていたとはいえ、日本ばかりではなく東アジアの中国や朝鮮へ、ひいては東南アジアや中近東(トルコやエジプト)へと広まっていったの

である。はじめヨーロッパに見出されたアジアは、こうして「亜細亜」という名称で刷新されていくことになるのである。

Ⅵ. 1つの「亜細亜」を求めて

ヨーロッパの「残りもの(the Rest)」としてのアジアではなく、ある程度まとまりを持った、共同体を形成しうる「亜細亜」の創造、それは近代日本の企図であった。アジア太平洋戦争の前後に、そうした議論が言論界を席卷したといってもいかもしれない。そしてそれらは意識すると否とにかかわらず、アジアはひとつである、というテーゼをめぐる議論された。このテーゼには当然、賛否両方の捉え方ができよう。賛成する立場に立つと、ヨーロッパとアジアとは、それぞれ一定のまとまりのある文明圏として存在している、または存在すべきであると考え。逆に1つのアジアを否定する側にまわると、何らかの中核(キリスト教など)によってまとまっているヨーロッパに比べ、東洋はまるで統一性をもたない国や民族の集合体だと見なす。

後者の立場に立つ一人に、歴史家の津田左右吉(1873年~1961年)がいた。1938年、津田は『支那思想と日本』において、「一つの東洋といふ世界は成りたつてゐず、一つの東洋文化といふものは無い」と断言した²⁸⁾。「いはゆる西洋文化はヨーロッパといふ一つの世界の歴史の展開に世伝形成せられた一つの文化である。それに比するものが東洋にはない。仏教や儒教が東洋文化の精髓であるとする見方があるが、どれも成り立たないと津田はいうのだ²⁹⁾。

これについて直ちに反論したのが、法学者の小野清一郎(1891年~1986年)である。小野の立場は、以下の通りである。「東洋は、私見に

よれば、やはり歴史的・文化的聯關をもつた一の世界である。其處には個性的な民族の精神と文化とのあることは充分にこれを認めるが、しかし其は相互に孤立したのではなく、やはり歴史的・文化的聯關があり、その文化の根柢には西洋のそれとは異つた或る普遍的精神がある」³⁰⁾。

確かに日本や中国や朝鮮といった民族ごとの文化的差異には、思いのほか大きいものがある。民族の特殊性の認識は、それとして大事なことである。言い換えると、現実の民族文化というものは、単一で純粋なものではありえない。それは絶えず消失や融合の機会にさらされているのである。津田は東洋文化においては民族の特殊性の方にばかり目を奪われ、逆に西洋文化においては比較的統合した部分にばかり着目している。小野には、それが矛盾するように思われたのである。

小野もいうように、文化の方面に偏している「津田博士にとつては『現代文化、世界文化、即ちいはゆる西洋文化』であつて、三者は同じものである」。また、その西洋文化の前には、東洋の文化は何らの意味をなさない。津田はそのように考えてしまったのだ³¹⁾。

本稿で述べたいことは、ヨーロッパやアジアの文化が、本質的に統合しているのか、それとも分離しているのかということではない。そうした本質論的な詮議は、結局のところ、判定のつかぬ議論となってしまうだろう。肝心なのは、そういうことではない。東洋あるいは西洋が、どういう点で統合しているといえ、また逆に多様であるといえるのかを明らかにすること。そして何ゆえに、そのような立場に立つのかということである。

このとき理解の助けとなるのが、方法は正反対ながら、津田と小野に共有されていたと思わ

れる、ある共通認識である。それは世界の統一ということであった。近代の超克がいわれたのも、ちょうどこの時期である。違っているのはただ、世界の統一のためにアジアにできることは何か、そしてまずは何から着手するのか、ということであった。

その問題意識を、津田のようにヨーロッパは統一しており、アジアはばらばらであるとする立場から展開すると、どういうことになるのか。その立場からすると、世界の統一のためにはヨーロッパに追隨するか、もしくは支配されるかの選択肢しか残されていない。日本その他の国々が強国となったあかつきには、あるいは西洋列強の支配を逃れるためには、ヨーロッパの帝国主義的植民地の後追いをするのも辞さない、とする考え方である。これも1つの道ではあろう。実際、満州事変以降の日本が、そうした側面をもっていたことも事実である。「西洋人は、日本が平和でおだやかな技芸に耽っていたとき、野蛮国とみなしていたものである。だが、日本が満州の戦場で大殺戮をはじめて以来、文明国と呼んでいる」³²⁾。1906年に英語で書かれた『茶の本』における岡倉天心(1863年～1913年)のこの主張は、1940年代という時代にあつては、西洋への皮肉を通り越して、後世のより悲惨な日本の行く末の予言の意味合いをもつ。

ではもう1つの立場、すなわち、あえて統一した「亜細亜」を打ち出すという立場には、どのような意味があるのだろうか。再び小野の主張を引いておこう。「今後東西の融合によつて眞の世界的文化が發展して行くべきであるが、其は單なる西洋文化の世界支配ではあり得ず、東洋文化と西洋文化との渾然たる融合の上に全人類によつて新に創造せられ、形成せられなければならぬ」と小野は心情を吐露している。

つまり「我々は嘗ての民族性を無視した世界主義　それも亦西洋文化を唯一の世界文化と考へる点では津田博士と寧ろ同一の観念を基底に持つものである。　を克服して、民族の現實性を認識すると同時に單なる民族主義をも超克して、民族が互に其の個性を尊重しつつ、古き東洋の文化的地盤の上に新なる東洋文化の創造・形成を理念とする東亞の新秩序をこそ欲するのである」³³⁾。

植民地化に躍起となっているヨーロッパに追隨して、統一的な文化を広めること。これは1つの道であるが、それこそ孫文(1866年～1925年)のいう否定的な意味を含む霸道への道ではないだろうか。だが東洋には、もう1つの道、すなわち賢人皇帝が理想的な政治を行うとされる王道の伝統がある。ともするとヨーロッパ人からは、「アジア的専制」の烙印を押されかねない考え方ではある。しかし植民地支配、文明において遅れた国民、持たざる国、そういった、ある意味ではヨーロッパ文明から排除された地域とそこに住むアジアの人々が連帯して、新たな文化を創造すること、またそのために互いに助け合うこと、それは現代的な意味での王道として位置づけることができるのではないか。

Ⅶ．むすび

西洋古代のアジア観には、自由のヨーロッパとそれを妨害するアジアという東西観があった。それは中世にいたって、キリスト教徒のヨーロッパ、異教徒のアジア・アフリカ、そして怪物の住む地域が三層の世界をなしているというように、より立体的に書き換えられた。さらにヨーロッパの外に文明を発見する大航海時代以降になると、その観念には転換を迫られる。そこで出された答えは、中国は哲学や文学におい

てはヨーロッパに比肩しうるのだが、それ以降は発展をやめてしまった。発展を拒んでいるのは、先哲崇拜やアジア的専制といった自由を抑圧された体制である。現代では「鉄のカーテン」に象徴されるように、ついにはヨーロッパにまで自由を阻止する「東」を設定するまでになった。これらヨーロッパによるアジア観を一言でいうと、アジアとはヨーロッパ以外に所在する個人の自由を奪われた地域である、とまとめることができるだろう。

明治以降の日本の近代化は、そうしたアジア観、東西観に修正をもたらした。それは、ヨーロッパによるアジア概念の歴史を引き受け、それをアジア自らの「主体化の過程」、アジアの自立として捉え返そうとするものであった。劣等者としての「東洋」から、互助連帯する「亜細亜」地域へという捉え直しを行なったのである。アジアの近現代史においては、そうした観念が、日本ばかりではなく東アジアへ、ひいては東南アジアや中近東へと広まっていったことを確認できるだろう。

本稿で、「方法としてのアジア」でもって、上記のような思想的転換を迫ったことの意味はどこにあるのだろうか。竹内は、「苦悩に共感するもののみが相手を理解できる、というのは、明治以来の伝統のなかにもあったアジア主義の心情に一致している」³⁴⁾という。だがそれは、決してアジアに閉じこもることを意味してはいない。またヨーロッパやアジアの文化が、統合しているのか否かを議論することでもない。肝心なことは、より広い世界の統一という視野に立つことである。「方法としてのアジア」であれば、そのことが可能である。なぜなら「苦悩」とは、もはや国も民族も越え、東洋も西洋も超えた、もとより普遍的な感覚だからだ。東洋によって、西洋を「包み直すこと」、そして

「普遍性を作り出すこと」。過去の過ちを繰り返さないためにも、そうした立脚点から、ありべき世界主義を構想しなければならない。「亜細亜」は世界のためにある。

注

- 1) 竹内好 (1993) 『日本とアジア』筑摩書房、469ページ。「方法としてのアジア」は1960年1月25日に開催された、国際基督教大学アジア文化研究委員会での講演記録をもとにまとめられたもの。武田清子編 (1961) 『思想史の方法と対象』に発表され、のち『竹内好全集 第5巻』に収録。
- 2) サイドが『オリエンタリズム』において主たる対象としたのは、西洋によるエジプト認識であったことを想起すればよい。
- 3) 太田秀通 (1982) 『ギリシアとオリエン』東京新聞出版局、10 15ページ。
- 4) 同上書、16 17ページ。
- 5) トインビーは、この歴史の一齣を「『アジア』と『ヨーロッパ』の永久的な確執」と呼んで相対化する。それによると、現代の東西欧州の対立、そして欧米とソ連の対立は、この古典的な東西対立の延長線上で解釈しうるものであった。トインビー、A・J (1971) 『『アジア』と『ヨーロッパ』 事実と幻想』『歴史の研究 第17巻』経済往来社、629ページ。
- 6) 同上書、631 633ページ。
- 7) Halecki, Oscar (1950) *The Limits and Divisions of European History*, Sheed & Ward, p.89.
- 8) 竹内 (1993) 前掲書、31ページ。
- 9) 岡崎勝世 (2003) 『世界史とヨーロッパ』講談社、71ページ。
- 10) 榎一雄 (1977) 「西と東 ヨーロッパの近代化とアジア」『榎一雄著作集 6 東西交渉史Ⅲ』汲古書院、426 427ページ。
- 11) 宮崎市定 (1942) 「東西洋と南洋」『宮崎市定全集 19』岩波書店、197ページ。
- 12) 榎 (1977) 前掲書、450 451ページ。
- 13) ヴェーバー、M (1972) 『宗教社会学論選』みすず書房、5ページ。
- 14) トインビーは、「東方正キリスト教会の歴史において、『ヨーロッパ』と『アジア』の区別は、たんに無意味であっただけでなく、積極的に人を誤らせるものであった」と述べている。トインビー、A・J (1971) 前掲書、639ページ。
- 15) 羽場久瀧子 (2004) 『拡大ヨーロッパの挑戦 アメリカに並ぶ多元的パワーとなるか』中央公論新社。
- 16) トインビー、A・J (1971) 前掲書、657ページ。
- 17) 同上書、649ページ。
- 18) 竹内 (1993) 前掲書、27ページ。
- 19) 小野清一郎 (1939) 「東洋は存在しないか」『中央

- 公論』第627号、9ページ。
- 20) 宮崎市定 (1942) 「南洋を東西洋に分つ根拠に就いて」『宮崎市定全集 19』岩波書店。
- 21) 山本達郎 (1933) 「東西洋といふ称呼の起原に就いて」『東洋学報』第21巻、120ページ。
- 22) 榎 (1977) 前掲書、426ページ。
- 23) Lach, Donald F. (1965) *Asia in the Making of Europe*, Chicago: University of Chicago Press.
- 24) Frank, Andre Gunder (1998) *Reorient: Global Economy in the Asian Age*, Berkeley, Calif: University of California Press, 山下範久訳, 2000, 『リオリエント』藤原書店。
- 25) ヴォルテールのほかモンテスキューも参照しているのは、イェズ会宣教師の書簡集であったとされている。中国については、デュ＝アルド (J.B. Du Halde, 1674 1743) の『支那帝国全志』が、詳細な記述を残している。榎 (1977) 前掲書、439ページ。
- 26) 津田左右吉 (1938) 『支那思想と日本』岩波書店、110ページ。
- 27) 飯塚浩二 (1963) 「東洋史と西洋史とのあいだ」『飯塚浩二著作集 2』平凡社、および杉本直治郎 (1928) 「本邦に於ける東洋史学の成立について」『歴史と地理』第21巻第4号を参照。
- 28) 前掲書、ii 頁。
- 29) 前掲書、106ページ。
- 30) 小野 (1939) 前掲書、10ページ。
- 31) 同上書、15ページ。
- 32) 岡倉天心 (1980) 『茶の本』(『岡倉天心全集 第1巻』) 平凡社、286ページ。
- 33) 小野 (1939) 前掲書、15 16ページ。
- 34) 竹内 (1993) 前掲書、111ページ。

参考文献

- ヴェーバー、M (1972) 『宗教社会学論選』みすず書房。
- 太田秀通 (1982) 『ギリシアとオリエン』東京新聞出版局。
- 岡倉天心 (1980) 『茶の本』(『岡倉天心全集 第1巻』) 平凡社。
- 岡崎勝世 (2003) 『世界史とヨーロッパ』講談社。
- 竹内好 (1993) 『日本とアジア』筑摩書房。
(1981) 『竹内好全集 第五巻』筑摩書房。
- 武田清子編 (1961) 『思想史の方法と対象 日本と西欧』創文社。

津田左右吉(1938)『支那思想と日本』岩波書店。

トインビー、A・J(1971)「『アジア』と『ヨーロッパ』 事実と幻想」『歴史の研究 第17巻』経済往来社。

羽場久滉子(2004)『拡大ヨーロッパの挑戦 アメリカに並ぶ多元的パワーとなるか』中央公論新社。

榎一雄(1977)「西と東 ヨーロッパの近代化とアジア」『榎一雄著作集6 東西交渉史』汲古書院。

宮崎市定(1942)「東西洋と南洋」『宮崎市定全集19』岩波書店。

(1942)「南洋を東西洋に分つ根拠に就いて」『宮崎市定全集19』岩波書店。

小野清一郎(1939)「東洋は存在しないか」『中央公論』第627号。

杉本直治郎(1928)「本邦に於ける東洋史学の成立について」『歴史と地理』第21巻第4号。

山本達郎(1933)「東西洋といふ称呼の起原に就いて」『東洋学報』第21巻。

Frank, Andre Gunder (1998) *Reorient: Global Economy in the Asian Age*, Berkeley, Calif: University of California Press, 山下範久訳, 2000, 『リオリエント』藤原書店。

Halecki, Oscar (1950) *The Limits and Divisions of European History*, Sheed & Ward.

Lach, Donald F. (1965) *Asia in the Making of Europe*, Chicago: University of Chicago Press.